

—文化・芸術のまち京都—

(1) はじめに

京都は、平安遷都以来およそ1100年の間、わが国の都であり、それを支えてきた公家の文化が綿々と伝えられてきた。その公家文化は、室町期以降の武家文化とも融合し、京都は洗練された日本文化の中心地としてあり続けた。近世に入ると、それまでの文化に町人文化が加わった。この時代には、政治的中心は江戸に移ったが、文化的中心は依然として京都にあった。

現在、京都を舞台にして行われる能・狂言、茶の湯やいけばななどの伝統文化は、伝統を守りつつ市民の間で親しまれ受け継がれている。

京都では、これらの伝統文化に関わる道具や和菓子なども、茶の湯などの発展とともに一つの文化・芸術として洗練されてきた。

また、京都の庭園は、京都の豊かな自然を活かし、その時々^{そのとき}の思想や文化を反映した一つの芸術として息付いている。

(2) 京の伝統文化に見る歴史的風致

ここでは、古くから京都において継承されてきた能や狂言などの伝統芸能、茶の湯やいけばななどの市民の間で親しまれている伝統文化などを例として、文化の中心地である京都の歴史的風致を示す。

(ア) 伝統芸能を楽しむ

a. 雅楽

(a) 建造物

○藤森神社本殿<市指定有形文化財>

伏見区の藤森神社は、平安期以前、神功皇后が軍旗や武具をこの地に埋め神まつりしたのが始まりと伝わる。

本殿（市指定有形文化財）は、宝暦5年(1755)に建築された宮中内侍所仮殿を、明和4年(1767)に移築したものと伝わる。本殿の前には幣殿・拜所・東西廊が建ち、これらが一体となった社殿構成は、市内の御霊社に共通する。境内には重要文化財の大將軍社社殿や八幡宮社社殿も建つ。



写真 2-4-1 藤森神社本殿

○八坂神社本殿<国宝>（再掲：P2-36 暮らしに息づくハレとケのまち京都の歴史的風致）

(b) 活動及び市街地の環境

「雅楽」は、日本古来の儀式音楽や舞踊などと、仏教伝来の飛鳥時代から平安時代初めにかけて中国大陸や朝鮮半島から伝えられた音楽や舞、そして平安時代に日本独自の様式に整えられた音楽などで、雅な雰囲気^{みやびなふんいき}に包まれた日本の伝統芸能である。10世紀に宮中のほか南都や天王寺に雅楽を司る楽人の組織である「楽所」^{がくせ}が成立し、中世末期から近世初頭にかけて、京都方（宮中・京都）、南都方（興福寺・奈良）、天王寺方（四天王寺・大阪）の「三方楽所」^{さんほうがくせ}と呼ばれる雅楽の伝承組織が整えられた。

雅楽は従来、日本の宮中に属する人、神社仏閣に仕える人、雅楽専門家などによって演奏されていたが、明治6年(1873)に雅楽に関する制限が解かれ、現在のように誰もが雅楽を演奏することができるよ

うになると、京都でも雅楽を演奏する「雅楽会」が結成され、それ以降、京都の多くの寺社で演奏が行われるようになった。

現在、各神社の祭礼や初詣などで雅楽は不可欠な存在となっており、人々が雅楽に触れる機会も多い。

三方楽所の一つである平安雅楽会は、恩賜財団平安義会を母体として大正5年（1916）に創立された京都で最も古い雅楽団体である。京都方の流れをくむ御所に属した宮廷音楽として伝承する。現在では、葵祭・石清水祭の両勅祭を始め、京都御所の春秋一般公開舞楽公演等多くの演奏活動を展開する。

鳴鳳雅楽会は、藤森神社の記録によれば、明治期に結成され、舞楽も行う。地域の人を中心に構成されており、神社の奉納演奏のほか雅楽体験学習などを実施する。



写真2-4-2 奉納演奏（藤森神社拝殿）

また、八坂神社において奉奏される「東遊」でも、弥栄雅楽会により雅楽が演奏されている。この「東遊」は天延3年（975）に、疱瘡の災を除くため、朝廷より奉幣したことが始まりと言われ、毎年6月に行われている。



写真2-4-3 東遊（八坂神社）（提供：八坂神社）

時間がゆったりと流れるような舞や音色は、こうした雅楽楽団により支えられ、人々を厳かで雅やかな王朝の世界に誘う。

表2-4-1 市内の主な雅楽会

	雅楽会名	主な活動場所
①	鳴鳳雅楽会	藤森神社
②	平安雅楽会	京都御所
③	弥栄雅楽会	八坂神社
④	いちひめ雅楽会	市比賣神社
⑤	松林雅楽会	本願寺山科別院
⑥	京都宙音雅楽会	吉祥院天満宮

藤森神社は、豊臣秀吉が伏見に城を築いて以来、京都と伏見をつなぐ重要な軍事道路であった伏見街道に面し、その氏子域は神社の北側約2km先の伏見稲荷大社周囲にまで及ぶ。伏見街道沿いは、賑わいを支える店舗と住宅が共存し、京町家が残る町並みによって、地域特有の風情を醸し出す。伏見稲荷大社から藤森神社一帯は、神社の社叢と一体となった歴史的な町並みが形成されている。

このような営みが、舞台となる寺社等の歴史的な建造物と一体となって、境内やその周辺において展開され、平安時代から綿々と続く宮廷の雅さに、京都の伝統芸能の奥深さを感じさせる。

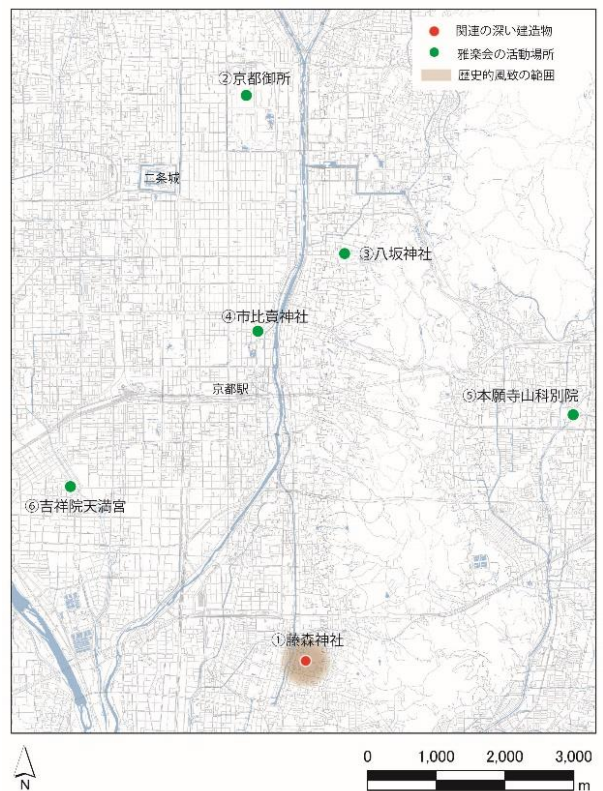


図2-4-1 市内の主な雅楽会の活動場所

b.能・狂言

(a) 建造物

能・狂言が行われる能舞台は、もともと舞台部分には屋根がかかっているが、観客席は露天となっており、現在のように能舞台と観客席とが一屋根の下に収まった能楽堂になったのは明治14年（1881）に

建設されたものが最初である。

○本願寺能舞台<重要文化財>

下京区の本願寺（西本願寺）にある本願寺能舞台（重要文化財）は、桃山時代に建築された。毎年5月の親鸞の誕生を祝って催される行事、「宗祖降誕会」では、この能舞台で祝賀能が演じられ、多くの参拝者に披露される。

さらに、本願寺（西本願寺）には、現存最古の能舞台といわれる、天正9年（1581）に建築された本願寺北能舞台（国宝）がある。



写真2-4-4 本願寺能舞台（提供：西本願寺）

○大江能楽堂

中京区の大江能楽堂は、観世流大江家5世又三郎竹之により明治41年（1908）に創建され、大正8年（1919）に現在の規模に改築された。創建当時の建物の古写真が残る。終戦直前建物疎開にあうも、舞台と見所は終戦により残存し、明治期の姿をとどめる。平成31年（2019）4月、一般財団法人大江能楽堂となる。



写真2-4-5 大江能楽堂（提供：大江能楽堂）

○平安神宮大極殿<重要文化財>、神苑<名勝>（再掲：P2-48 暮らしに息づくハレとケのまち京都の歴史的風致）

(b) 活動及び市街地の環境

室町時代に開花した京都の文化を代表する能は、江戸時代まで猿楽と呼ばれており、平安時代に宮廷で演じられていた唐に由来する散楽と平安中期に生

まれた田楽が猿楽に大きく影響を及ぼし、室町時代に今日の能楽の基礎を成した。

能は、観世流、宝生流、金春流、金剛流、喜多流の五流派があり、各家元は江戸時代に江戸に移ったが、現在京都には一時衰退しその後再興した金剛流の家元がある。

一方、江戸時代の京都では、能の歌詞である謡曲を歌う謡が一般の人々に流行していたことから、後に「京観世五軒家」と呼ばれる家々が観世流の素謡を広めるとともに、「京観世」という固有の文化を形作った。観世屋敷の管理や運営を任された片山家は、現在も京都における流派の中心的存在であり、能楽は観世会館を中心に定期的で開催されている。ものづくり・商い・もてなしのまち京都の歴史的風致でも示した片山邸には、片山家が所有する能面や能装束が保管されている。

また、その他の能楽堂としては、明治時代後期に建てられた大江能楽堂があり、建築以来この地で能の公演を続ける。他にも市内には河村能舞台などがあり、ここでも定期的に公演が行われるほか、本願寺能舞台でも年に一度祝賀能が演じられる。



写真2-4-6 大江能楽堂能舞台（提供：大江能楽堂）

京都薪能は、毎年6月の夜、平安神宮社殿前の舞台で行われており、初夏の風物詩となっている。昭和25年（1950）に京都市と京都能楽会の共催で開催されて以降、毎年開催される。『京の年中行事』（昭和33年（1958）発行）にも記載がある。

夕方から能を始め、日が暮れるとかがり火を焚き、屋外での奉納の風情を醸し出している。平安神宮を舞台に幽玄の世界が繰り広げられる。



写真2-4-7 京都薪能

能と同様に猿楽から発展した狂言は、明治期以降は、能、式三番と併せて能と呼ばれる能の一部として演じられる間狂言のほか、いわゆる独立して演じられる狂言がある。近代以降、京都では「お豆腐主義」を公言する茂山千五郎家が庶民的な親しみやすい狂言を演じて市民に親しまれた。市内では、昭和32年(1957)から大蔵流茂山千五郎家・忠三郎家ちゆうざぶらうの協力のもと、毎年市民狂言会が京都観世会館で開催される。



写真2-4-8 市民狂言会(出典：第214回市民狂言会)

能や狂言、謡の活動場所は、能楽堂などの舞台だけではない。大江能楽堂周辺は、商業施設と住居が共存するいわゆる職住共存の京町家が連坦する町並みを形成するが、そうした京町家の中には、前を通ると、謡の声や鼓の音が聞こえるところもあり、能の稽古のために京町家の2階座敷を板張りにしている所もある。

本願寺(西本願寺)周辺は、西本願寺・東本願寺の寺内町として発展したところで、仏壇等の店舗や宿坊である和風旅館が軒を連ねる町並みを形成しており、能や狂言に欠かせない足袋を扱う法衣店や小道具の扇子の製造・販売を行う店舗等も、京町家で商いを営む。

このように、歴史的な能舞台などで演じられる能・狂言は、寺社等の歴史的建造物や、町の各所から聞こえる謡に親しむ市民の声、周囲の歴史的町並みと

一体となり、人々の趣味の奥深さと情緒を感じさせる。

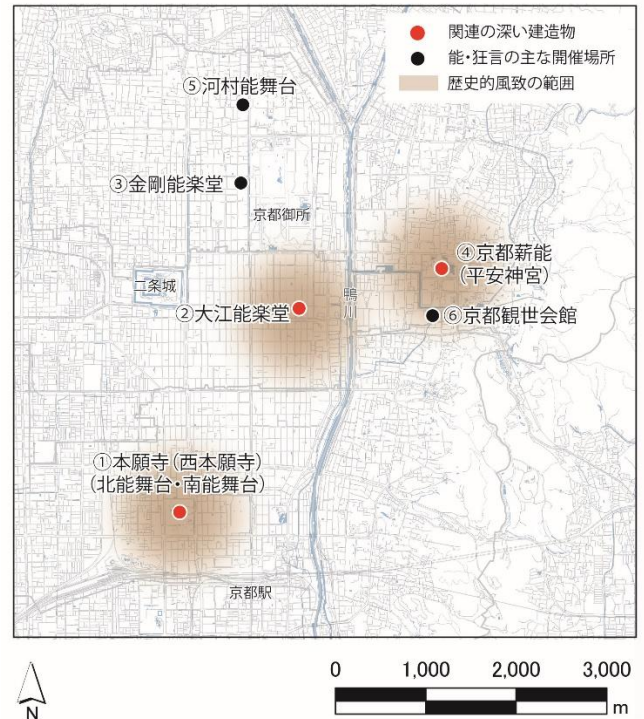


図2-4-2 能・狂言の主な開催場所

c.歌舞伎

歌舞伎は、今から400年前、出雲阿国が北野天満宮の境内で「かぶき踊り」を踊ったのが始まりであると伝わる。

(a) 建造物

○南座<登録有形文化財>

東山区の南座は、元和年間(1615~1623)に京都所司代が公許した七つの芝居小屋に起源を持つ劇場。明治時代まで存続したのは、南座・北座の二つのみであったが、このうち北座は明治26年(1893)に四条通拡幅工事により廃絶し、南座のみがその位置もそのままに残された。現在の建物は昭和4年(1929)に建てられたもので、平成30年(2018)に大規模な耐震補強工事が行われた。



写真2-4-9 南座外観(提供：南座)

(b) 活動及び市街地の環境

師走に入り、京都南座に顔見世のまねき看板が上がると、京都では日々の御近所同士の挨拶のなかに、「顔見世」の言葉が上ようになる。その彩りに、早くも正月気分がただよい、あわただしさも忘れてしまう。吉例顔見世興行は、古くから京都の師走を彩る風物詩であり、寛政11年(1799)に発行された『都林泉名勝図会』には既にその様子が描かれる。

『日本歳事記』(大正11年(1922)発行)や『京の年中行事』(昭和33年(1958)発行)にも顔見世やまねき看板の記事が見られる。



図2-4-3 顔相見

(出典：『都林泉名勝図会』(寛政11年(1799))

顔見世のまねき看板には、その年の顔見世に出演する歌舞伎役者の名が一枚ずつ筆太の字で丸く大きく黒々と書かれる。歌舞伎独特の勘亭流という書体で、観客を招くための宣伝看板でもある。毎年11月下旬には南座の正面に、檜の一枚板の看板が2段にわたって掲げられる。



写真2-4-10 南座まねき看板(令和元年の顔見世より)

毎年12月を中心に行われる吉例顔見世興行は、江戸時代、劇場と役者が一年ごとに契約を結び行われるもので、翌年一年の一座の顔ぶれを披露することから、最も重要な興行とされていた。現在は、東西の歌舞伎俳優等の名優が顔を揃え、華やかな歌舞伎の祭典として、人々に親しまれている。

この時期、八坂神社参道の祇園商店街のアーケードには、顔見世興行の提灯が下がり、一帯が興行の

開催を歓迎する。

南座がある八坂神社参道周辺は、祇園甲部の花街でもあり、「祇園町南歴史的景観保全修景地区」に指定される花見小路や「祇園新橋伝統的建造物保存地区」や「祇園繩手・新橋歴史的景観保全修景地区」、「先斗町界わい景観整備地区」に指定されるお茶屋街なども近く、茶屋様式の町家を中心とした京都の花街らしい町並みを形成する。12月になると、こうした町並みのなか、まねきを模した飾りがついたかざしを髪に挿した舞妓の姿が見られる。

このように、南座の顔見世のまねき看板や芝居絵、提灯は、師走の慌ただしさや京都ならではの華やぎを醸し出し、伝統的な風情を感じさせる。

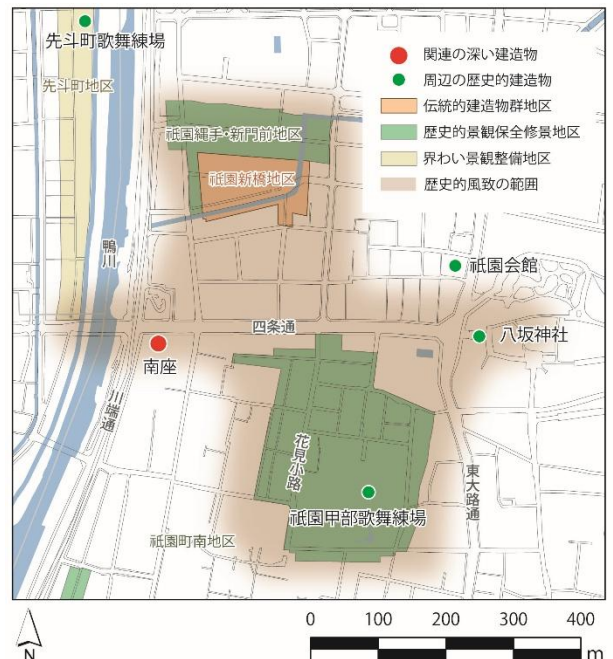


図2-4-4 吉例顔見世興行(南座)

(1) 伝統文化に親しむ

a. 茶の湯

茶の湯は、室町時代8代将軍足利義政の頃に、村田珠光等によって草庵茶といわれる新しい茶礼を創案したことに始まるとされる。その後、武野紹鷗に伝えられ、さらに門下の千利休において大成され、戦国武将のなかで広がっていった。利休没後、千家は利休の子の少庵により復興され、孫の宗旦の三人の子が、表千家、裏千家、武者小路千家を興し、三千家の基礎ができあがった。

(a) 建造物

○表千家祖堂<重要文化財>

上京区の表千家祖堂(重要文化財)は、千利休居士の座像を祀った堂であり、屋根は茅葺で、二畳台目の上段と四畳半からなる。江戸時代中期に建築さ

れた。



写真2-4-11 表千家祖堂 (提供：表千家)

○裏千家住宅<重要文化財>

上京区の裏千家住宅（重要文化財）は、数寄屋造りの洗練された茶匠の住宅である。大規模で、複雑な形態を示す。茶室や広間、玄関、台所などから構成される。天明の大火（天明8年（1788））以降に次々と建築された。茶室の一つ、寒雲亭は天明8年（1788）に建築された。



写真2-4-12 裏千家住宅 (提供：裏千家)

○聚光院本堂<重要文化財>

北区の聚光院本堂（重要文化財）は、大徳寺塔頭の本堂である。入母屋造、檜皮葺の造りをもち、天正11年（1583）に建築された。内部の襖絵は狩野松栄、永徳父子の作品で国宝、重要文化財に指定されている。



写真2-4-13 聚光院本堂 (提供：大徳寺聚光院)

○二条城清流園

中京区の二条城清流園は、旧二条離宮（二条城）（史跡）内の庭園で、昭和40年（1965）に京都市が賓客をもてなしたり、市民の憩いの場として、旧角倉家から譲り受けた建築部材や庭石、樹木を使用し、整備した庭である。園内では毎年春と秋に茶会が行われている。



写真2-4-14 二条城清流園

○北野天満宮本殿<国宝>（再掲）P2-79「ものづくり・商い・もてなしのまち京都」の歴史的風致

(b) 活動及び市街地の環境

江戸時代の元禄期になると、茶の湯は町人社会に広がり、三千家や藪内家のほか、現在も伝統を守り続けている久田家、堀内家、速水家の茶家により多くの町人に普及した。

近代に入り、一般教養として茶の湯が取り入れられるようになり、人々の日々の暮らしのなかで、親しまれるようになった。

現在の京都では、茶道の家元である表千家（不審菴）や裏千家（今日庵）、武者小路千家（官休庵）の住宅や茶室が建ち並ぶ小川通の周辺は、全国から修行のために来訪した和装の人々が行きかい、華やかな雰囲気醸し出している。また、風情ある建物の表構えは、日本的な美の世界である茶の湯のもてなしの心を自然に感じさせる。

この小川通はかつて小川が流れていたところで、表千家、裏千家、武者小路千家の三千家が小川通に面しているのは、良質の地下水が湧くためであったと言われる。ここでは、茶の湯に関わる人々の日常の姿があり、行きかう和装姿の人々や、茶道具店に並べられた道具類もまた、町並みに風情を与えている。三千家とは場所が離れるが、藪内家（燕庵）は、世界遺産に登録されている西本願寺の東に位置し、その構えは本願寺界隈の風情を醸し出す一つの重要な要素となっている。



写真2-4-15 小川通の町並み

表千家では毎年3月27日に、裏千家では毎年3月28日に千利休の遺徳を偲んで営まれる法要と茶会が開かれる。これは「利休忌」と呼ばれ、『日本歳事記』（大正11年（1922）発行）や『京の年中行事』（昭和33年（1958）発行）にも記載がある。千利休の墓がある大徳寺塔頭聚光院でも、三千家が交代で、重要文化財の方丈や茶室の閑隠席などで法要や茶会を行う。大徳寺周辺は、境内の緑と伝統的町家とが一体となった門前の町並みを形成し、こうした歴史的な町並みを背景に、茶会へ向かう和装姿の人々が見られる。

京都の神社仏閣では各家元の献茶奉仕が行われるほか、これらの寺社に付属する茶室等では「月釜」と呼ばれる会員制の茶会が普及し、御香宮神社、北野天満宮、梨木神社、大徳寺、など現在20箇所以上の寺社で月釜が行なわれている。新年の頃になると、和装姿で「初釜」に向かう人々が往来し、町並みに彩を添える。

また、北野天満宮で開催される献茶祭は、豊臣秀吉公が天正15年（1587）10月1日に催した「北野大茶湯」に由来する400年の歴史をもつ祭典であり、『日本歳事記』（大正11年（1922）発行）にも記載がある。京都の4家元2宗匠（藪内家・表千家・裏千家・武者小路千家・堀内家・久田家）が6年ごとに輪番で奉仕し、神前に供える献茶式を行ったあと、境内では各所に茶席を設け、参拝の者もお茶を楽しむことができる。

他にも、元離宮二条城清流園では、毎年10月下旬から11月上旬の3日間に市民大茶会が開催される。市民大茶会は京都市保存資料によると昭和31年（1956）から続く茶会で、裏千家、表千家、藪内家の3流派による本格的なお茶会であるが、誰もが参加できる催事として賑わいを見せる。茶会当日は、二条城の東大手門を背景に和装姿の人が列をなし、華やかな雰囲気醸し出す。



写真2-4-16 市民大茶会



写真2-4-17 市民大茶会に向かう人々

このように、歴史的な寺社等において行われる茶会等の営みとそこに集う和服姿の人々が、寺社等の歴史的建造物やその周辺の町並みと一体となって、静寂で落ち着いた情緒を醸し出す。そして、小川通をはじめとする茶道家元の並ぶ町並みでは、茶道に関わる人々の日々の生活、茶道具等を扱う営みが、茶の湯の本山である京都の歴史を感じさせる。

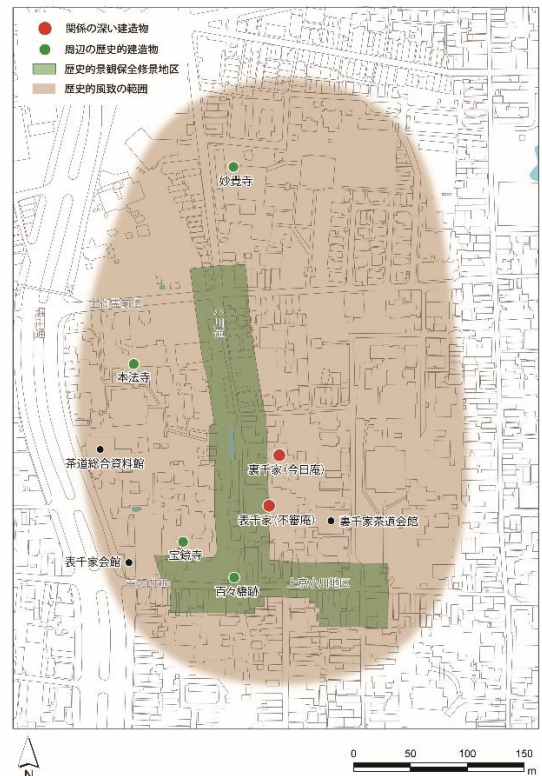


図2-4-5 小川通

表2-4-2 市内の主な月釜

茶会名	主な月釜会場
常楽会	大徳寺（聚光院等）
松尾大社献茶会	松尾大社
弘道館茶会	弘道館
御香水保存会	御香宮
山蔭亭保存会	菅大臣神社
吉野会	常照寺
鈴声会	真如堂(真正極楽寺)
松向軒保存会	北野天満宮
青蓮会	青蓮院
染井会	梨木神社
澄心会	平安神宮
含翠会	泉涌寺
庭湖会	大覚寺

表2-4-3 市内の主な茶会

茶会名	主な茶会会場
市民大茶会	二条城
北野天満宮献茶祭	北野天満宮
蛍火の茶会	下鴨神社
秋の夜の観月茶会	高台寺
光琳乾山忌茶会	平安郷
煎茶献茶祭	平安神宮
献茶祭	伏見稲荷大社
献茶式	醍醐寺

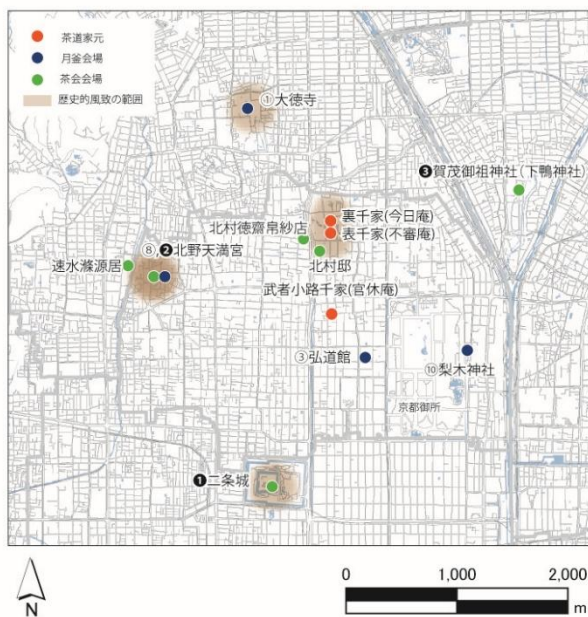


図2-4-6 市内の主な茶道家元と月釜・茶会

b. いけばな

神前の依代や仏前に花を手向ける供花を源流に持つ「いけばな」の成立は、室町時代に珍しい花を唐物の花瓶に挿して並べ優劣を競う「花合わせ」や、仏教的行事「法楽」の飾りなどとも、深く関わっていたと思われる。

応永6年(1399)三代將軍足利義満は、完成した北山殿(鹿苑寺)で「七夕花合わせ」を催し、以後幕府において毎年行われる慣例行事となった。

(a) 建造物

○頂法寺(六角堂)本堂<市指定有形文化財>

中京区の頂法寺は、本堂の平面を六角形とすることから「六角堂」と呼ばれる。現在の建物は、元治の大火で焼失後、明治10年(1877)に再建されたもので、六角形平面を持つ重層の本堂と単層入母屋造の拝堂からなる複合仏堂で、装飾的な要素が強い外観は霊場建築の特徴をよく示す。



写真2-4-18 頂法寺本堂

(b) 活動及び市街地の環境

六角堂の僧である池坊専慶は花の名手と知られ、寛正3年(1462)鞍智高春に招かれ、金瓶に草花を数十枝挿した。それを洛中の好事家が競って見物したと伝えられている。その後、同じく六角堂の僧である池坊専応は度々宮中に招かれて花を立て、また立花の理論と技術を体系化した『池坊専応口伝』を著し、華道が成立した。江戸時代初期、三十二世池坊専好(二代)(1575~1658)は立花の名人で、禁裏において開催された立花会の指導をし、後水尾天皇の寛永文化サロンの担い手の一人となった。

現在、京都には池坊をはじめ、江戸時代中期に興った松月堂古流、その後の正風遠州流や専慶流など多くのいけばなの流派が存在し、市民に教養として親しまれている。

六角堂の立花会の様子は、池坊立花として『日本歳事史』(大正11年(1922)発行)にも記載がある。現在も六角堂境内では、3月と11月にいけばな展

が行われ、家元をはじめ門弟の作品が多数並ぶ。さらに、3月のいけばな展の期間に開催される「六角堂 花供養・花行列」では、全国の花弁生産団体から奉納された花材で制作された巨大な花御輿や花車を中心とした花行列が池坊短期大学を出発し、山伏の法螺貝の音とともに、僧侶、供華奉仕者、お稚児さんなど40名が、烏丸通を練り歩く。

また、毎年1月5日には初生け式が行われ、全国から集まった約1500名にも及ぶ門弟たちが参加し、艶やかな着物姿で新春の花をその場で生け、一年間稽古に精進することを誓う。

六角堂に隣接する会館では、こうした特別な日だけでなく、日々華道の稽古が行われ、生け終えた花を包み直して携えて持ち帰る人々の姿が見られる。

六角堂周辺は、都心部にあり、幹線道路に近接して商業施設等への建て替えが著しいが、中高層建築物の間に寺社や職住一体の京町家が残る町並みが見られる。花を携えた門弟の姿や花供養・花行列の様子は、こうした町並みに華やぎをもたらす。

六角堂の他にも、京都の寺社等では、神仏に花を献じる献花が行われており、華道の源流である仏前供花の精神を見ることができる。伏見稲荷大社や平安神宮等では毎年献花の儀が行われる。

献花奉仕の一行が装束や着物をまとい、献花を行う様子は、厳かであり華やかな風情を醸し出す。

このように、献花祭などの活動が、寺社等を舞台にして行われ、境内地やその周辺において華やかな風情を感じさせる。



写真2-4-19 六角堂花供養 花御輿 (提供：池坊総務所)



写真2-4-20 伏見稲荷大社 献花祭

表2-4-4 市内の主な献花祭

	献花祭名	主な会場
①	花供養会	頂法寺
②	献花祭	伏見稲荷大社
③	献菊祭	西本願寺
④	女人厄除祭	市比賣神社
⑤	奉祝献花祭	平安神宮
⑥	御室流華道	仁和寺
⑦	紫陽花祭	藤森神社
⑧	方除大祭	城南宮

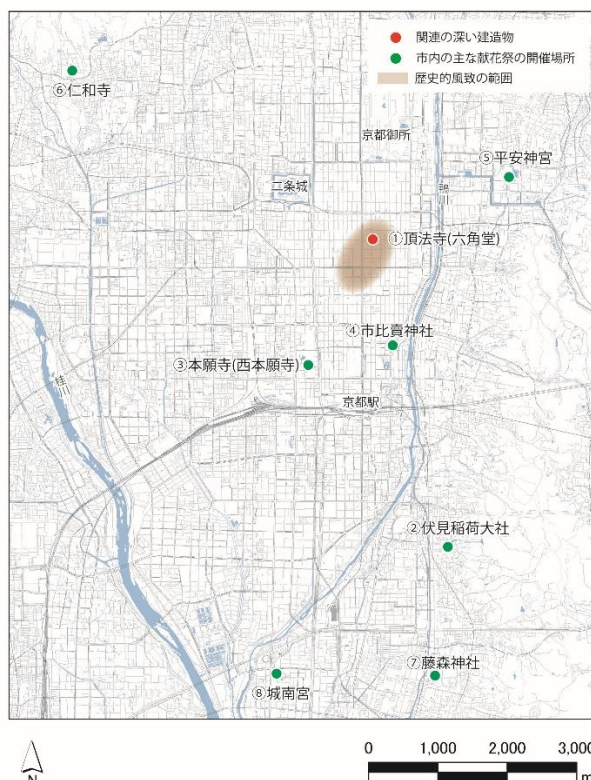


図2-4-7 市内の主な献花祭

(7) まとめ

例に示した以外にも、京都では様々な伝統芸能・文化・芸術活動が行われている。香木を焚きその香りを聞く香道では、老舗において香道の教室が開かれ、また、嗜みとして匂い袋をしのばせる人もある。さらに、茶の湯とともに煎茶も寺社等で茶会などが行われているなど、その分野は多岐に渡る。

このように、京都では、これらそれぞれの営みが、寺社をはじめとする歴史的な建造物や町並みのなかで繰り広げられ、その音や彩色、取り巻く雰囲気は、歴史の重層性と伝統の重さ、そして京の伝統文化の奥深さを感じさせる。

(3) 京の伝統文化を彩る芸術に見る歴史的風致

京都の伝統文化でも特に茶の湯に欠かせないものとして、古美術や茶菓子がある。また、伝統文化を楽しむ空間である建物や庭園、そこで披露する衣装など、これらは伝統文化の発展とともに洗練され、芸術として、新たな文化として昇華されていった。

(7) 美術に親しむ

京都の絵画の歴史は古く、平安時代に描かれた源氏物語などの絵巻物の「大和絵」、宗教絵画、狩野探幽による御所や二条城の障壁画、琳派を確立した尾形光琳など数多くの優れた絵画や画家を生み出してきた。

近代に入ると、伝統と進取の気風に満ちた取組が盛んに行われ、東京と並んで日本の美術界をリードしていった。

(a) 建造物

○佐々木竹苞書楼ちくほうしやうろう

中京区の佐々木竹苞書楼は、寺町通に位置する寛延元年（1748）創業の古書店で、漢籍などの古書を読ませてもらいにここに通ったという富岡鉄斎による看板が店内に残る。美術書を中心に揃え、能や狂言、華や茶、浮世絵など古典芸能に関わるものも多く扱う。

現在の店舗は、京都市文化財保護課調査資料によると、元治元年（1864）の大火で焼失後、慶応2年（1866）に再建された。



写真2-4-21 佐々木竹苞書楼

○八木美術店

東山区の八木美術店は、新門前通に位置する創業は明治35年（1902）の古美術商であり、古伊万里等の陶磁器や古道具などを扱う。

店舗は、登記簿によれば明治38年（1905）以前に建築された京町家であり、総2階の外観を有し、軒下の陳列棚等から店の様子がうかがえる。



写真2-4-22 八木美術店

(b) 活動及び市街地の環境

京都には美術と関わりのある町が形成されてきた。その一つが寺町通である。寺町の地に寺院が集められ、寺町といわれるようになったのは天正 18 年 (1590)、豊臣秀吉の京都大改造計画の一環だった。秀吉は洛中に散在していた寺院を、東京極大路があった辺りの東側に移転させた。集められた寺院の数は 80 にもおよぶ。門前町としての体裁が整ってくるに従って、寺町通の商店街も形成され、17 世紀前後から、位牌・櫛・書物・石塔・数珠・挟箱・文庫・仏師・筆屋などの寺院に関連した店が建ち並び始めた。江戸時代初期に成立した『毛吹草』には、寺町通の名産として絵像や木像、紙表具、屏風といった、美術につながるものが示され、美術の町並みが形成されていたことがうかがえる。さらに、その他の店も並びだし、現在の寺町通の商店街の基礎ができたという。



写真2-4-23 寺町通の町並み

新門前通及びその周辺地区も、古美術のまちとして有名である。この界隈は、知恩院の門前町として元禄期を前後して形成され、古くは茶道具商が立地した。円山公園にホテルが建設され、この界隈が河原町通に出る散策道となることで、明治末期以降古美術商が集まり、情緒豊かな町並みが形成された。

現在でも、寺町通には古美術や日本画、洋画、版画を扱う店や、佐々木竹苞書楼のような美術書を扱

う古書店、画廊などが京町家などの歴史的建造物で営まれ、歴史的な町並みを形成する。

新門前通は、美術品を扱う同業者町を形成しているが、家主の人格を象徴するように、一軒として同じ家屋がなく、風情を凝らした町家建築で町並みが構成される。その店先には、古美術商であることを匂わせるような美術品が展示され、町並みに彩を添えている。



写真2-4-24 新門前通の町並み

京町家を活用して設えた古美術商は、八木美術店に見られるように、1 階の軒下にショーウィンドを設け、店の看板商品が置かれるなど、店の特徴が現れる場所である。古美術の収集家や愛好家だけでなく、関心のある市民や観光客の目を楽しませ、古美術や骨董品が創り出す、美術と伝統の風情が、通りを行き交う人々を魅了している。

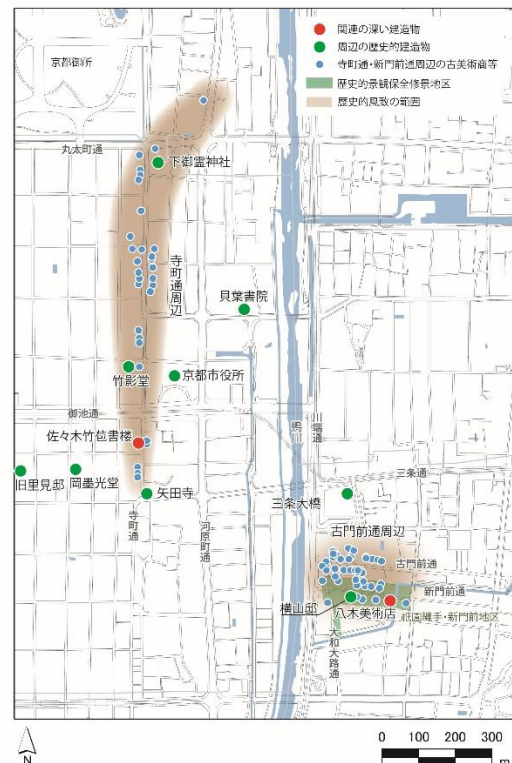


図 2-4-8 寺町通・新門前通周辺の古美術商
(参考：寺町美術通HP，鴨東古美術會HP)

(1) 菓子を楽しむ

京都は、平安京遷都以来、千有余年の永きにわたり都が置かれ、日本の政治・文化・宗教の中心地として栄えた。また、山紫水明の京都は、豊かな地下水に恵まれるとともに、周辺地域から質の高い原料が集まるなど、菓子作りにとって優れた環境に恵まれていたといえる。

京の菓子は、二十四節気をはじめとする季節の移ろいをことさらに大切にする精神性のもとに生まれ、さらに、茶の湯の発展とともに洗練を極め、旬の素材を使うだけでなく、意匠で季節を先取りして表現するものとなった。

(a) 建造物

○塩芳軒

上京区の塩芳軒は、薯蕷饅頭の始祖林浄因の流れを汲む名店「塩路軒」から別家したもので、創業は明治15年(1882)、大正初期に当地に移転した。登記簿等によると大正4年(1915)に建築された町家の老舗京菓子店である。

和菓子と関係の深い茶道の宗家が集中する西陣に位置し、当店の創業時からの銘菓として知られる焼饅頭「聚楽」は、かつて近くに聚楽第があったことに因む。



写真2-4-25 塩芳軒

○菓祖神社

左京区の菓祖神社は、京都菓子業界の総意により菓祖神社創建奉賛会が結成され、昭和32年(1957)にお菓子の神様として知られる、兵庫県中島神社、和歌山県橋本神社、奈良県林神社の祭神を鎮祭された社として建築された。鳥居前の石柱に昭和32年(1957)建之の刻銘が見られる。



写真2-4-26 菓祖神社

(b) 活動及び市街地の環境

京都の暮らしのなかで、お供えや客のもてなし、お祝い、年中行事などのしきたり、町内の集まりなど、その場に応じて添えられる菓子は、季節を彩りながら、人の心を表現したり、その場の雰囲気盛り上げたり、人間関係を円滑にするコミュニケーションの道具として上手に使われてきた。また、花びら餅や水無月、月見団子など、年中行事にまつわる季節感あふれる菓子は、その時期になると店先に菓子名の貼り紙が出され、ショーケースに菓子が並ぶ様子は、人々に四季の移ろいを感じさせる。

塩芳軒周辺は、高密度な市街地のなかの各所に寺社が立ち、西陣織の生産の場である織屋建の特徴的な京町家が多く残る。老舗の菓子店はこのような旧市街地の所々に溶け込み、季節ごとに展開される菓子は日常に心地よいメリハリをもたらす。



写真2-4-27 菓子店の貼り紙

菓子の意匠や製法は、代々受け継がれてきた菓子屋の職人の知恵と技によって育まれてきた。また、店や作り手によって意匠や製法などが異なることもあり、同種の菓子のなかにもその個性が光る。さらに、菓子屋は、職人の伝統を暖簾分けした店にも引き継ぐなど、菓子文化の維持継承に尽力しており、明治15年(1882)に創業した塩芳軒もそうした菓子店の一つである。塩芳軒には明治から大正期の店舗前で撮影した古写真が残り、当時の繁盛ぶりを物語

る。

市内に数多く点在する老舗京菓子店舗は、江戸時代、幕府の要請により禁裏御用達業者の集まりである「上菓子屋仲間」を結成、明治維新後に解散を余儀なくされたが、「菓匠会」を結成し、暖簾を守り続ける。

現在は、正月の準備として暮れに見られる程度になったが、かつては、毎朝、菓子箱に菓子の見本を並べ、お得意先に注文を伺いこいく御用聞き(廻り)が習慣であったように、顧客本位の姿勢を基本とし、茶席等、様々な用途に応えるため、菓子屋には、茶道や古典芸能など、文化芸術に対する教養も求められる。



写真 2-4-28 菓子職人の知恵と技
(出典：京都をつなぐ無形文化遺産 HP)

また、菓祖神社では、吉田神社の節分祭等の祭礼にあわせて、境内で豆茶やお菓子が振舞われる。このとき神社の参道に行列ができる等、こうしたもてなしが風物詩となっている。

このように、地域の行事やしきたりと結びついた菓子は、人と人のつながりを大切にしながら地域に根差した店で作られ、地域の文化と深いつながりを感じる。

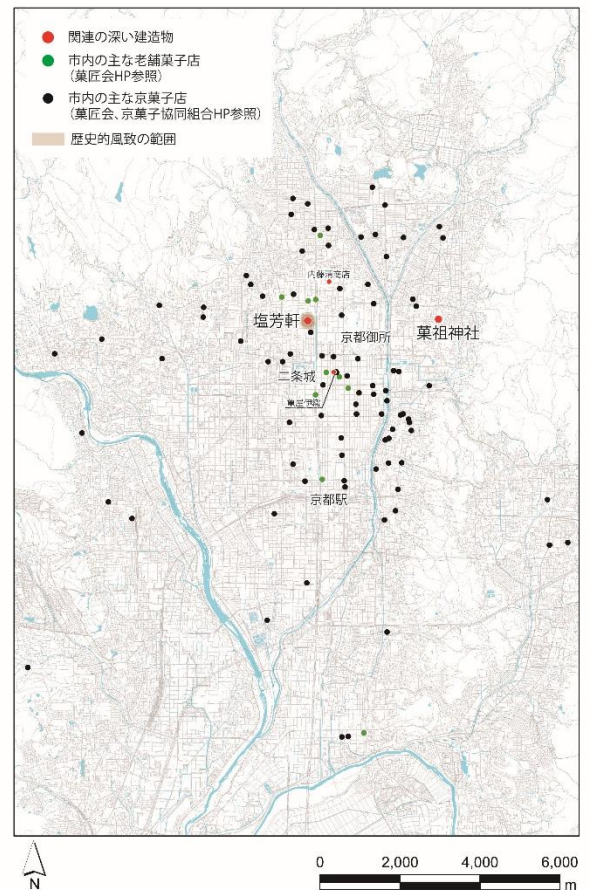


図2-4-9 市内の主な京菓子舗
(菓匠会、京菓子協同組合加盟店)

表2-4-5 市内の主な老舗菓子店

店名	所在地
亀末廣	中京区
亀廣保	中京区
亀屋陸奥	下京区
三条若狭屋	中京区
塩芳軒	上京区
嘯月	北区
千本玉袴軒	上京区
総本家 駿河屋	伏見区
鶴屋吉信	上京区
二条 若狭屋	中京区
本家 玉壽軒	上京区

(※菓匠会加盟店のうち店舗が戦前に築造されたもの)

(7) 庭園を受け継ぐ

平安時代初期から、平安京の内外には、神泉苑、淳和院、嵯峨院等の池を有する庭園が数多く作られたが、これらの庭園は正殿の正面を中島のある池とし、流れ（遣水）から池に水を流し込むもので、後に寝殿造庭園として結実する作庭の手法も確立していき、平安時代末期には、日本最古の作庭技術書といわれる『作庭記』が著された。

中世以降の寺院などに設けられた庭園には、岩や砂を山水に見立てた枯山水庭園、池の周りを巡ることのできる池泉回遊式庭園などがあり、遠くの山並みを借景として背景に取り入れることも行われ、表したい理想郷や世界観などを庭に映してきた。

近代に入り小川治兵衛や重森三玲、佐野藤右衛門らの作庭家などにより、さらに多様な庭園が造られてきた。

(a) 建造物

○二条城二之丸庭園<特別名勝>

中京区の二条城二之丸庭園は、慶長8年（1603）の築城時に作られ、寛永3年（1626）に作事奉行・小堀遠州のもとで改修された。この時期の城郭には、居住のための御殿と共に豪華な庭園が作られた。二条城は当時の御殿と庭を一体的に鑑賞することができる我が国で唯一の事例である。この庭園は、公的な領域である大広間の西面、将軍に近い人々の対面所として用いられた黒書院の南面に位置する。



写真2-4-29 二条城二之丸庭園

○無鄰庵庭園<名勝>

左京区の無鄰庵は、明治27～28年（1894～1895）ごろ、山縣有朋の別邸として造られたもので、庭園（名勝）は、山縣の指示のもと、七代目小川治兵衛（屋号「植治」）によって造られた。

昭和16年（1941）に財団法人無鄰庵保存会から京都市に寄贈され、昭和26年（1951）に国の名勝に指定された。

東山を借景にした開放的な芝生空間と軽快な水の

流れを有する。



写真2-4-30 無鄰庵庭園

(b) 活動及び市街地の環境

京都には、名勝等の庭園が数多くあることから、造園事業者が多数ある。なかでも、宝暦年間（1751～1763）より代々、治兵衛という名前を襲名する小川家や、嘉永元年（1848）創業の植彌加藤造園株式会社等の事業者により、作庭技術や精神を引き継ぎ、無鄰庵等の庭園の維持管理を担っている。七代目小川治兵衛の名は、明治27年（1894）発行の『京都案内 都百種』にも記載される。

庭園の優美な姿を保っていくためには、日常的な庭園の手入れは必要不可欠である。それぞれの庭を知り尽くした造園技術を有する専門家や造園事業者が、長期にわたり維持管理を行ってきたことで、昔と変わらない姿が保たれてきた。

無鄰庵や周辺の邸宅群でも、人をもてなすため、日々庭園の手入れを行う。七代目小川治兵衛による庭園を持つ数多くの邸宅が群をなし、また南禅寺をはじめ、庭園を持つ寺社が多く存在するこの界わいは、日本庭園技術の粋が集まる場であると言えよう。

無鄰庵周辺は、東山の借景空間の保全を図るため、建築物は和風外観の度合いを高め、京都らしい雰囲気を持する。特に南禅寺参道沿いでは、趣ある参道景観を保全するため、連続感のある和風塀とマツ並木が保全される。塀越しに見える庭園においては、花や葉の色付きはもちろんのこと、春から初夏にかけての芽摘み、お盆前や暮れの手入れの様子など、四季を感じずにはられない。

また、二条城では、二之丸庭園や本丸庭園のマツの樹姿が宮内省時代から今日に引き継がれている技術により手入れされている。さらに、幕末の古写真には既に存在が認められるソテツは、南方の植物で寒さに弱いため、毎年12月初旬頃に、ソテツの幹全体に、こもやワラなどを巻く防寒養生を行っており、この手法も宮内省所管時から引き継がれ、少なくとも

も約 70 年以上も続けられている庭園管理作業の一つで、二之丸庭園の冬の風物詩となっている。



写真2-4-31 庭園の手入れ

このように、京都には古来多様な庭園の文化が息づいており、宗教的風景や自然の風景、物語の風景を写すことで、独自の世界観を創りだしてきた。

京都の庭園は、専門家の高い技術により受け継がれ、市内各地でその技とその時々時代の美意識を感じることができる。

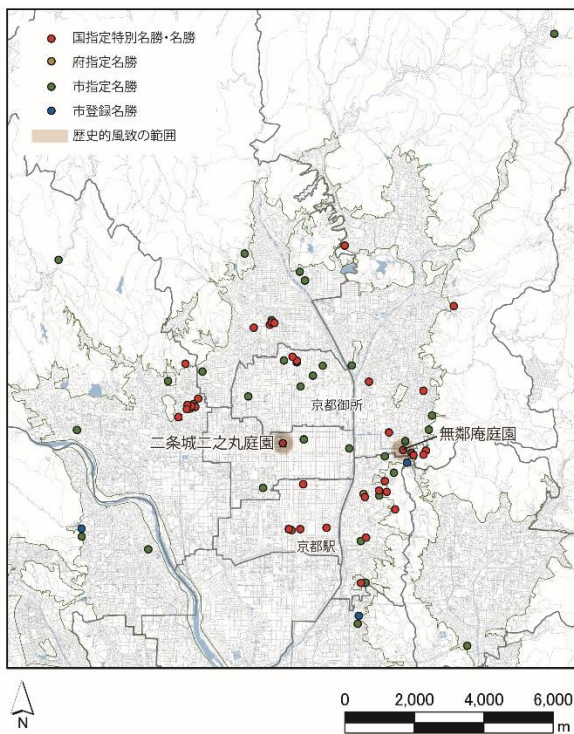


図2-4-10 京都の主な庭園（指定登録名勝）

(I) まとめ

京都では、伝統文化の発展とともに磨かれ、洗練されてきた古美術や菓子、庭園など、伝統文化を彩る芸術が大切に継承される。これらは、歴史的な建造物や町並みと一体となって繰り広げられ、人々に伝統の風情や季節感を感じさせる。

(4) おわりに

京都を舞台にした文化・芸術は、能や狂言、雅楽、茶の湯や華道に係わる催事等により培われるとともに、古美術等を扱う店舗や京菓子の文化を支える老舗店舗が市街地に点在するなど、市民の日常生活と催事が一体となりながら、京都特有の文化・芸術として、今日まで受け継がれてきた。

また、京都の豊かな自然を活かし、その時々思想や文化を反映した庭園も造園技術とともに受け継がれてきた。

そして、このような伝統を受け継ぐ活動や、自然美、伝統美が巧みに取り込まれた生業が、歴史的な建造物や町並みの中で繰り広げられ、歴史の重要性と伝統の重さを感じさせる文化・芸術のまち京都の歴史的風致を形成している。

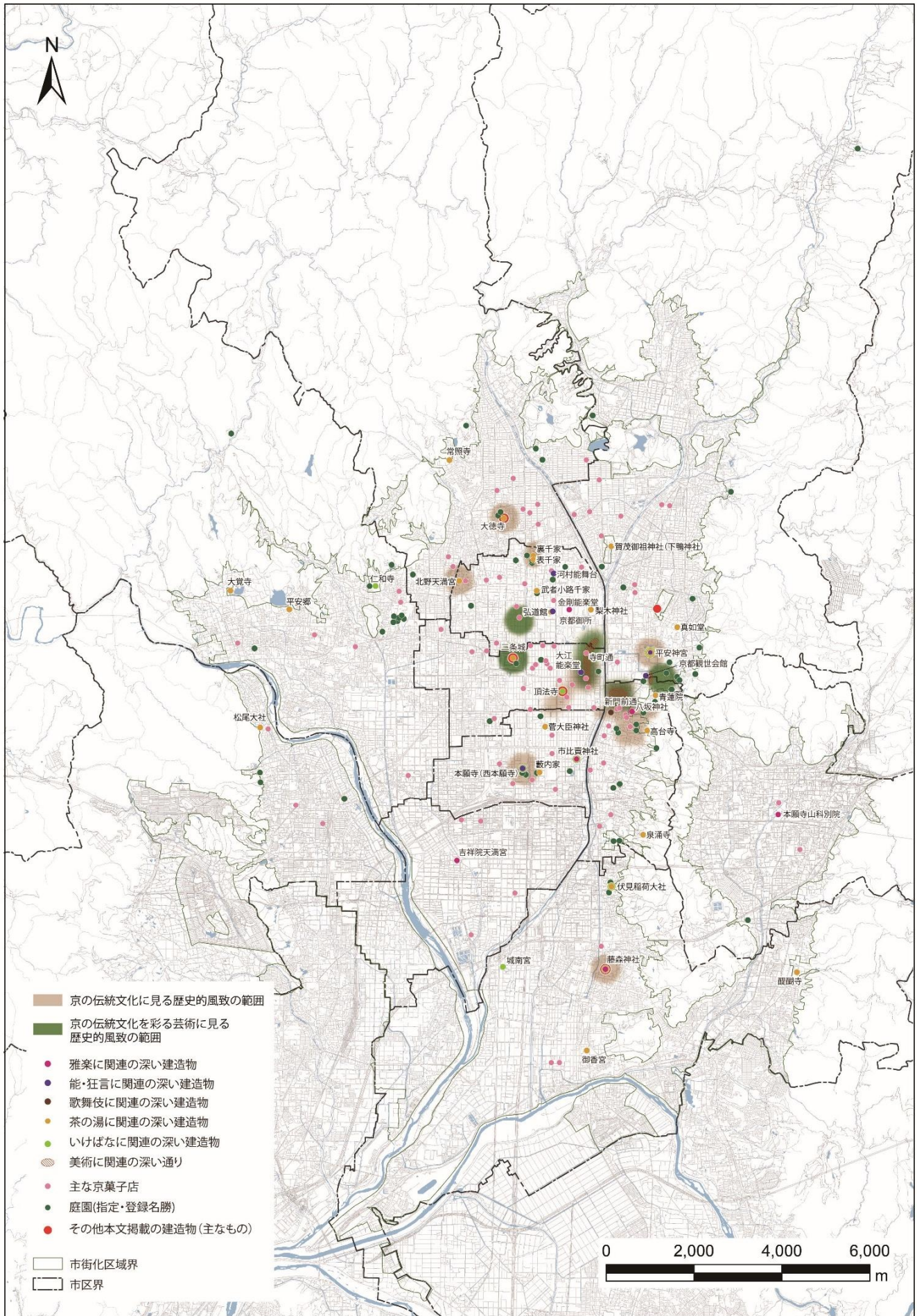


図2-4-11 文化・芸術のまち京都に見る歴史的風致（総括図）